

東京商科大学  
一ツ橋大学

蹴球部部報

第二号

一九五〇年八月

## 巻頭言

東京商科大學教授

藻利重隆

(一)

蹴球については何も知らない、全くの素人である私が、部員諸兄の熱意に動かされて、ついに部長の取をけがすこととなりました。

何かお役に立つことが出来ればとは念じていますが、皆目見当がつかまません。利用価値の程も疑われますが、宜しく御利用下されば幸甚に存じます。

団体競技において必要なことは、第一には部員の各位がポジションの任務を十分に果しうるための技を練るとともに、全員がチーム・ワークを円滑に遂行するための秩序的訓練を怠らないということだろうと思ひます。技において秀で、規律において厳正であることなしには団体競技に勝れることは出来ないでしょう。しかし、それに覆ることも劣らない重要性が、部員諸兄の士気に見出されねばならないことも常識だと存じます。そして士気の昂揚は、部員の全員が部を中心として一致団結することによつてのみ、果されうるものだと思われれます。先輩諸氏につながる部の伝統に思いを致し、部の厂史を建設する者の誇りを体して、和氣霽々のうちに斗志を培って行くことの意義を痛感致します。

部の前途を祝福してやみません。

# 渡辺 俊夫

癡兒。

○運動とは情熱の排け口ではなく、情熱を傾倒すべき所。

○サツカーとは、如何に馬鹿になるか云う事、ボールだけの存在の発見、私一人の消滅、いや、ボールと私の肉体とが一体となつてグラウンドに燃焼する事だ。

○馬鹿になるとは、純粋な、凡てを奪れる白紙の状態、つまり *Blank* な清純さに還える事である。

○グラウンドは肉體鍛錬の斗牛場ではなく、精神を白熱精錬する坩堝である。

○ボールは生きていた、死んだものと思つていた私の拙善の消滅。

○ボールを蹴つて御覧、火が出るよ、その火は私を燃焼させる。

○ボールがインステップで尻を切つた時、私は今迄の形骸から軽々と地り出された。

○魂は暖かく丸いものだ、形がないとは、こんだ謬見、その薪木は、

ボールであり、部であり、先輩であり *etc.*

○タツチライン—私の生命を削る

ゴールライン—私の不徹底を嘲笑する

ゴール —私の精神的未熟を疑視するゼロチンだ。

○動くことは知る事である。何れ本質を、本質とは抽象的マジック的なものではなく、実体そのものである。それは思索の追隨を許さない。何故なら思索とは客観世界即現象界の皮相的理解であり、精神面への投与なるが故に。此の本質を知るのガッ動である。何故なら現象界の外的表面的理解ではなく、内部に深く踏み入つた体験実感なるが故に。

○試験場の空気には毒気がある

どう見ても青鬼だね

細いペンが肥杓子のように見えて

それで名譽という黄金を汲みあげる

汲んでいる当人は鼻が利かぬが

総員二十四名の終戦以来の大人教を擁して、吾がサツカー部は今やは切ればかりの運動の中にある。そして二十名の参加を得て一週同行つた合宿により、私達凡ての出発点であり回帰点である運床は既に形成されたと思つる。后に残されたことは、唯私達一人々々が一つの確たる目的に向つて、個性を殺さず、然も又小社会の中に個性を生かしつつ、まつしぐらに邁進することである。世のハイマートを持つた私達のこれからの飛躍は誠に刮目して俟つものがある。部員諸兄の一層の奮起を望んで已まない。

—合宿を終えて—

○分析的、抽象的、批判的精神。

総合的、具体的、創造的精神。

少くとも私は后者を取らう。

○私は何時立ち去るか、そして又、何に立ち去るかを知つた。あ、偉大な

傍で見てゐる者には鼻もちならぬ奥さ  
どれ雨にならぬ中に

私も一桶汲みあげようか。

○暗い室内・赤ランプ　そして夜

書棚にびつり百万年の智慧、  
やれやれ、神経の鉄線化　錆びぬ様  
御用心。

### 酒　石川正和

私は性来酒に弱く好まないためか、  
米だ酒の美味さはわからない。醜酔  
ひといふことはないが、五合も飲む  
とそろ／＼怪しくなつて来る。瓶身  
米に彩られ大いに陽気になつて笑ひ  
たくなつて来る。至つて経済的健康  
的であり痔さへ悪くなければたまに  
はい、ものである。蹴球部では現部  
員にも中々の酒豪がゐるが、先輩と  
なると全くものすごい。屢々先輩を  
お訪ねすると我々にかこつけるわけ  
ではあるまいが、とにかく飲め／＼  
といふことになる。後に退くは男の  
恥と思ひ切つて飲む。それも私の胃  
の収容限度まではいゝのだが、限度

に達するやサツカー同様精神力でフ  
アイトを振ひ起すに至る。その頃には  
身体中が脈をうつ度に、どかんと  
かんと火山の爆発の如く鳴動する。  
かくて酒は良薬よりも苦く味は、ず  
に飲み込む。遂には口を平で抑へ飛  
び出して怖れ止むを得なくなる。  
しかし私もかうやつて鍛えた身にい  
くらか強くなつてゐるのであり、酒  
飲むもの飲まれるものに非ずとは  
言ふが、先づ飲まれてみなければ酒  
を知り酒に親しむことは出来ないで  
あらうと思ふ。

### 一陽天復の日　吉沢弘恭

葉落乃　枝枯れた冬の果樹も、春に  
めぐり遭へば再び花を咲し実を結び  
ます。

私達サツカー部も今年は二十数名と  
云ふ戦後初めての多数の部員諸兄を  
擁するに至りました。試合をするの  
も辛うじてだつた一時に比べて、将  
に一陽天復の感を察し得ないもので  
あります。今や国立原頭、緑一面に

覆はれ、来るべき秋の爽り多きを思  
はせるものがあります。こゝに部報  
に寄せて所感の一端を述べてみよう  
と思ふのであります。

抑々、サツカー部は、私達氷ごこに  
育ち、養はれる所の母胎であり、小  
さき社会であります。随つてそこに  
臨む部員諸兄の態度・性格も多様で  
あり、無限の豊富さを持つてゐます。  
私達はこの多根性のうちで動搖し迷  
扱し乍ら、絶えず自分自身を形成し  
て行くのです。私達が一致団結を口  
にする時も、その一致は、平板なも  
のではなく、内に豊富な内容を含ん  
だものでなければなりません。個性  
の特色を拂拭する事に依つて統計的  
集合的に獲得せられた一致は固より  
一致の最も安価なものであらうと思  
ひます。辺さん云はれた様に、私  
達の部生若は、一即多、多即一の関  
係に成立つ全体であり、個人格の生  
生発展がとりも直さず全体の発展で  
ある事を常に忘れてはならないので  
あります。私達は卑大に流れず、卑

下に陥らず、常に「親愛」の気持ちに徹し、自己の領域に於て誠実を傾け盡さねばならぬと思ふものであります。

幸にしてキヤプテン迎さんを中心にして久しく忘れられておたかに見えた思想と同題とが、新しい機縁にふれて復活し、隠現し乍ら部生活を貫き通つてゐる事を見、且又、部の生活が徐々として崩壊しつつ、あるのを見て欣快之に過ぐるものはありません。部生活をして更に根底のある、充実した生活たらしむべく、私達は各々の完成に向つて不漸の歩みを続けねばならぬと思ふものであります。

— 以上 —

### 井田ギツチヨシ

#### 断章

- 生きるものの 悲哀とやせ我慢。
- ヲン“と嘲笑してみたが、それだけに弱々しい僕だった。
- プルクワ、プルクラ、正に自嘲。
- 知るといふこと、だが知らねばな

らぬ。

- “万物は流転する“ヘラクレイトス、”万物はこん倒する“イダタカヤ
- “沈黙は金“、危険な年令“堂々二本立封切、於地球座。
- “疲れている“少々バタ臭くなつて来た。

- “戦争、又あるかも知れないね“次の頭向もう別のことを考えている。
- 幸福、それは心にもれること。
- 生きること、難かしい、だが何かしらある。
- パラドックス、気付いた時、それを愛する様になつていた。
- “そんなことあるものか“—哀れな肯定の表現。

- 冷笑、それも悲しい自己肯定
- 試みること、これが僕の取柄かも知れぬ。
- 体を随使すること“生きている“
- “いふ意識がある。

- “晴雨に拘らず決行、百万円懸賞“誰も不思議に感じない、確率が0に近いと分つていても。

○ 幼い子が父親に抱かれて寝ている。

祝福してやつて大いのか、悲しむべきなのか。

○ “ちやあさようなら“本当に別れ互のかわらぬ。

○ “ちやあ又“再び会える確信があるのか知らぬ。

○ 凡そ結果と予想くらい自分を購ますものはない。

○ 過去—我々が考ふる程頼りにならぬ未来—我々が夢見る程希望はない。

○ なさんとして果さずあゝ矛盾的自己同一

#### お礼状

簡單な礼状なのに

何故私は大切にするのでろう

その葉書から 君の愛を想ふのか

コウトウ無智な私の考へ

それさえ 最早笑ふことが出来ない

一枚の紙にあらゆる神経を集中して

ほのゆるる愛を夢見る

信すること おろかかも知れぬ

考えること 無駄かも知れぬ

夢見ること アナク口かも知れぬ  
だが、しよせん私にはそうする外術  
はない

透明な季節を憶れる私には  
一枚の紙屑でも大切なのだ

その紙が新しい生命を私にもるかの  
様に

一九五〇年五月

病床より 篠田 清

先輩の皆様、サツカ一部の諸君、小  
生永い向病気の爲非常な脚心配をお  
かけしましたが、お蔭様ですっかり  
元氣になりました。茲に重ねて御礼  
申し上げます。

下度一年といふもの皆と共に汗を流  
して練習することも、ファイトを燃  
やして闘ふことも出来ませんでした  
が、貴の生活は常にサツカ一部と一  
緒であり、部への愛着は益々深くな  
つて来た次第です。僕が予科一年生  
の頃先輩達がサツカ一部は心の故郷  
だとしきりに云はれていました。そ  
の時は僕も單純にロマンチックな氣

持で解してしまいましたが、今日になつ  
て初めてこの言葉が、実感として、  
びつたりと胸に響いて来ます。僕は  
苦楽を分か合へる貴の友を持つこと  
を一番の幸福と思ひます。

球と人生。グラウンドに於けるプレイ  
は、個性の延長であり、眞面目なプ  
レイヤーこそ、自らを開拓するとこ  
ろの人格者であると思ひます。躍動  
する青春の生命を護え、その活躍を  
期し且つ誓いつ、よりよき明日の建  
設を急願してやみません。

“あこがれの痕”

うら枯れた野を、とぼ／＼と歩いて  
ゆく旅人の胸にも、  
明日への希望が宿つている、  
それは夢い期待であるかも知れない、  
しかしそれなくして  
彼は一歩も前進することは出来ない  
のである。

x

彼の人生の一体何処に幸福があるの  
だらうか？

呪われた運命を背負つてゆく傷まし  
き姿よ！  
何故お前は生れて来たのか？  
何故お前は死んでしまはないのだ？

x

鬼よ、あの屋は高く建っている、お  
前にとつて幸福は限りなく美しい、  
あゝ、だがそれを抱むことは絶対に  
不可能なのだ、  
あきらめよ、そして自らの涙にその  
影を映して泣け、  
そこに詩が生れ、歌が流れる

x

如何なる絶望の刻にも、微笑みの可  
能性を見出し、大いなる愛に生きよう、  
絶えず美しい心を持つて故郷への道  
を進まう、

幸福の探求とは――

華かな幻影を追ふことではなく  
さゝやかな喜びを味ふことである。

“省みつゝ” 小林達夫

人間が厂的産物であるならば年齢  
をとる事も亦その具体的要件の一つ

である。そしてあまりにも世俗的な

私には、その年令の中に恋を語り、子を懐ふ人間の具体相を見出し得る様な気がする。何故ならば年令には経験といふ尊い裏づけがあるのであるから。

ところで二十三年三月月なる今の私には身にしみて次の如き事が感じられる。

それはサッカー部がいかなる形に於ても自己主張すべき処ではないといふ事である。一人一人の單純ではあるけれども志義あるであらう経験の中にこそ、互が白らを涵養すべきではないだらうか。

### 回顧三年

高橋敬哉

顧れば、私水予科の一年生の夏休の終りに入部して、最初の練習を松本の合宿で行つてから、既に三年の月日が過ぎつてしまつて、やがて四年目を迎えようとして居ます。まさに炎天下、西をめぐるアルプスを始めとして、四方を山で囲まれて、そ

よこの風一つ吹かぬグラウンドで初めて球を蹴つたのでした。

以て三年、当時は全く苦痛以外の何者でもなかつた練習がやつと近頃では楽しみになるようになりました。

これは私が単部に進んで上級生が少くなつた故もありませうが、それ以上には部の雰囲気私を暖く抱きとつてくれて、部全体としてのチームワークがとれてきて、また、部員の数が多くなつて練習に励みが出てきたためと、私の内面から見れば、ボールをキヤツ子することそれ自身に、ホールを蹴ることそれ自身に、更にゴールキーピングの動きそれ自身に、汲めども盡きぬ面白みを見出しかけたことが、その理由であると思ひます。

この練習を楽しむ気持ちになれたのが私のこの三年間の私なりの收穫であります。この僅かな收穫がいささかなりとも「我が愛するサッカー部の成長する力の一助になれば、私の望外の喜びであります。

あけぼの、堤 光義

私がサッカーを全く知らずに入部した当初は、それこそ五里夢中であつた。練習は怒鳴られる儘に唯走り、唯蹴る重労働とさへ思はれたのであつた。インフレの昂進と共に加はる生活の重圧、更には脚気などといふ厄介なものまで背負ひ込んだ時には暗澹たる気持ちになり勝ちであつた。しかしこうした時に私を励まし慰めて呉れたのは、部の強いグマインシヤフトの空気があつたのだ。苦しくなればなる程、この濃い血が私を鞭撻し導いて呉れたのだ。

石の上にも三年とやら、最近ではやつとボールの面白さといふか疑わしさといふか、兎に角ボールを生きたものとして感ずる事が出来る様になつてきた。重労働としか思へなかつた練習が、しらすくしの向に今では全く楽しいものになつた。私をこれ程迄に育んでくれたサッカー部を求める心を意識せぬ裡に人生の一頁をめぐつてくれた愛する部、私は心

から感謝すると共に、我がサツカー部の發展に努力したい。

—私もどうやらサツカー部と離れられない人間になつてきた様だ—。

### 馬鹿になり切れざるの記

#### 針谷 操

感情的な対立の下で自己の弱味をかくしつゝ、單に金というもののためのみ、幼くということは何と辛いことか。然も現実は何の感傷もなくそれを吾々に強要する。

人生とは苦しみの連続かもしれない。然し乍ら、その無限大の苦しみの中にたとえ些小なりとも有限の喜びがなかつたならば、吾々は生きる希望も失ふことである。

象牙の塔より眺める世の中は未だ幾分潤いがある様に見える。だが一度塔より外に出るならば世の中は甘いものではないことが実感をもつて吾々に迫つてくる。然もその中に入るに最早象牙の塔に戻ることは一つの賢沢と考へられる様になり、一つの

現実よりの逃避所であると思われれる様になる。

然し乍ら、學問の世界は勿論逃避所では断じてない。火花を散らす決戦の場である。世の中の荒波を後にして僕は又象牙の塔に戻つて行く。たとへ世間の人が何といふとも。

#### 新制ニ 石井弘志

予科入学以来既に二年三ヶ月となる。運動に、勉強に、と考へても前者とも満足を持つて退ひ起す事は出来ない。

元来勉強はあまり好きではないので—嫌ひであるとも言へないのですが—予科三年間はサツカーに全力を挙げたいと思つた、そこに快的な学生生活が見られると思つたのです。その結果、楽しかつた部生活にも興はず、サツカーに於ては、肉体的な弱さと、それをカバーする精神的なものとの不足とから、殆ど進歩は見られなかつたし、又勉強に於ても、單純、空虚な頭腦しか所有しない事になつてしまつた。勉學の真は究も

角、サツカーに就いては、それに全力を注入せんと志した以上反省せざるを得ない。身体が強壯でない所からそれに拘泥して、最後の頑張りと言はうか、頑張つた上の更に頑張りには缺けるのです。この真改良すべき第一のものとし、努力したいと思ふ。『サツカー病』といつて、病れる事のない熱病にとりつかれた上は、これに徹するより道はない。』

#### 新制ニ 斎藤 隆

愈々夏休。三ヶ月の一学期は何すると言ふわけもなく過ぎて居つた。一週間の合體、月の夜の散歩。それは嘗て黄金の陽光に何も考へず、悩まず、楽しく過せし幼き頃の思出の痕だ。そうして心は常に何かしら滿ちれぬ林しさに抱かれて、遠い未來へ背のびしてゐる。そうして夏休が来る。自由な心の故郷が。一面たまたまなく孤独な、危険な道場が。泳がう。山へ行かう。望む自然



の下に於てのみ人間は小児たりうるのだ。

才能のはかなさと、絶望の淵におのゝく前にもう一度あの美しいアルペンの朝に接しよう。

ロウセン・モルゲン。それは慰さめ勸げまし力づけて呉れるだろう。

### 部生活に就て

新制二 田原洋二

昨年九月蹴球をはじめて九ヶ月、何とか部の諸兄に引っぱられて今日までついて来ました。はじめの内は他人に追いつこうとしてあせつて背のみをしては自分の進歩の遅いのに失望し、失望しては蹴球をやめようかとも思つたこともありました。しかし最近ではいくらのろく／＼してあてもついて行けば、引っぱつていつてもらへば、学生々活でしか経験することの出来ない部生活といふものが、何か形のあるものとして得られるのではないかと思つておます。いくらおせつてもどうにもならない。勿論

自分の缺点は改良するように努めるべきだが、ついて行けさへすればそれで勝者だ。途中で投げ出した時は、又スタートから始めなほすか、ごもなければ二走を追つて何も得ないことになつてしまひそうです。

"Slow and steady wins the race" とは蓋し至言だと思ふのです。私の *slow* をいやに苛護したみたいになり

ました。が、……部生活について何も口はべつたいたい事は言へないと思つておました。書いてみたらこれも私の部生活の貴重な経験でした。

### スポーツに就て

新制二 高田菊夫

スポーツの意義についてあれやこれやと考へ理論づけようとした所でその意義が明になるものではない。僕にとつてみれば球を蹴る事自体、球と共にグラウンドを駆け廻ること自体

に何とも喜ばぬ事を見出すのである。すべての事を忘れて球を追ふそんな時に机上の理論は問題となら

ぬ。要は練習につぐ練習であり、そして始めて球がよく蹴れパスがよく出来るのである。いくゆ本を讀み、頭の中で蹴り方を考へてみた所でそんなものは砂上の楼閣を何の役にも立たぬ。理論と実践の不一致が拙実に現はれて居る。

背い顔をして象牙の塔のほんの軒下にかまへて學問、社会を論じ天下の惨状を嘆じて得々たる運中の一度バツトを握りしめて球を打ち、球を蹴る時のぶざまな様をみる時何か人間として片輪な様な気がする。

と言つても我々が肉体的な面のみを重視して精神的な面をないがしろにする由ではない。然し一般的にみてもスポーツをする人間の性質が明るく愉快で明朗活達であると言はれ、その反面思慮的な面に於ては比較的若いと言はれる。

スポーツをする人間が快活であるといふ事はスポーツマン全てに通用する言葉であるとは限らないが、彼等は精神的な苦惱といふものを徹底的

に追究しそれを解決するための苦しさに耐へられず、スポーツといふものを通じた一種の肉体的苦痛により精神的な苦惱より逃避して安易な状態を求めて居るためではなからうか。それ故スポーツマンで偉大な思想家哲学者は聞いた事がない。

学生にしてスポーツをする者がスポーツを通して精神的な苦痛を避ける様な安易な精神生活を送るようではならぬ。

緊張に対する弛緩、無躁に対する余猶、理智に対する情熱、靜思に対する活動、独善に対する協和、斯様な所にスポーツの重要性があり又スポーツが没我と犠牲とを要求する心身鍛練の道場であるとしてもそれは研學、思索の本義に対する支流として人面完成のための一過程としなければならぬと思ふ。

新人の弁 新制一 神代祥男

長い面の願いが果された。五戸ッ見が江戸に帰ることが出来た。そして

學回への憧れが充されると共に、ボールへの憧れがおこつた。

中学から高等學校を出るまでに、様々な部に入り自分でやつてみもした。そして最後に「部と勉強は両立し難い、が部には何物も勉強以上のものがある」と自分勝手な理論(?)を考へ出した。大學に入るや生意氣にも実行しようとし、サッカー部に入つた。口先だけでは駄目だ、実行だ。

何だかこの運動は私に適している様に思われる。三ヶ月の練習、一週間の合宿は僕を離れ難いものにした様だ。人一倍我儘な僕だからサボリ始める時があるかも知れないにも拘らず。

汗を流してボールを蹴う。他からみると簡單で、馬鹿げているかも知れない。けれども何となく愉快に感ぜられて仕方がない。

僕は望う、体は小さくても舌と共に部のために微力を捧げんことを。

私の蹴球生活 新一 宮田幸三

蹴球をやりに出したのが高津高校二年の時、以來運動なら何でも好きだが蹴球は最初得意の手が使えないので少し困つたなと思つた。然しやり出して見るとやはりスポーツ、他の運動に優るとも劣らぬ面白さが解つて来た。尔来約二年今では到底止

められさうにない。抑々運動といふものはあらゆる悩みを忘れさせて呉れ吾々を心の底から愉快にして呉れる。加之それは部組織に依つて醸し

出される雰囲気により倍加され殊に此の様な団体競技は知らずく一致団結の精神を養つて呉れるのである。而してそれは学生生活の意義の大半を占めるものだと思へる。飯は人の

二倍食ひ、エネルギーも人の二倍蓄へ一日たりともじつとしておられない僕にとつて此の運動はあらゆる面でプラスになる。勉強の方は？と言はれるかも知れないがそれは時間の使ひ方、物事にけじめをつける事に依り難なく補はれる。加之運動に依

つてこそ又新たな精神力が養はれ、

學問と運動は立派に而立すると確信する。

(私の日記より)

新制一 高末 隆

スロウ・イン！ 夫のボートがどうしても上手くさばけない。右に廻り込んでみると、私にとっては處女分野であるがやつて見た。確に上手く行く。しかし未だ意識的の感を抜け切る事が出来ない。反射的に左右自在に動けるようになる必要がある。之は私には新しい、興味ある試みだ。練習中、好く失敗許りやつて怒鳴られる。すると何となく箱の蓋が騒ぎ出す。自己の自稱的なブレイの優越性に対する自尊心、自惚を叩かれた夫の感じが交錯して反逆の声をだせる。「五月囃い野郎だ」と。

誰かや、「素直さ忘れぬように」とと発言、一取りも直さずこの不平介子に対する忠告なんだが——とした。「技あり」だ。確に不平介子にとつて大切な居る所を痛くして居る。蒸

化す事なく、此の忠告を私は受け入れよう。僅かに五日間の合宿生活しか経験しなかつたが、有意義に（少くなくとも、自己の缺欠を指摘して貰えた事、自覚する事が出来た事に於て）夫の日を送つたと、少からざる満足と愉悅に浸つて居る。

日記から 新一 三井 光輝

三月六日（月）

生きるということとは決して呼吸することを意味するのではない。行動することゝ意味するのである。

四月三日（日）

若い者として何時迄もイヴンの馬鹿でありたい。生一本でありたい。

四月二十七日（木）

幸福が或る物として得られるのではなく創造せらるべきものであるという限りに於て、私自身過去の狭かつた生き方に対する後悔の念を察し得ない。熾烈な青春の持産であるにも拘らずや、まずれは打身に来つた自分

が幸福創造への道を歩み必死に罰

の道は崩れるのだ。五月二十四日（木）

愛するものの爲に死んだ故に彼らは幸福であつたのではなく反対に彼等は幸福であつた故に愛する者のために死ぬ力を有したのである。（三木清「人生論ノート」より）

五月二十五日（木）

幸福は望ましい。しかし悲喪の中に不幸の中に更に自分を強くしてくるもの、在ることを知る必要がある。六月八日（木）

一度限りの生命、一度限りの青春（テエホフ）

六月九日（金）

時間的に如何に長く生きるか、それは第一の問題ではない。如何に深く生きるか、それが第一的なる問題である。妥協なしに辛直に、大胆に、痛切に躊躇いつつ、人生を何処迄深く生き得るかということが私達の課題である。我輩吹すど踊らずという様な懶い生き方でなく魂のどん底まで

脈管の端の端まで、我生まつ、あり

という淺利たる感激の中に生きていくことが第一である。

苦しみを恐れてはならぬ。青春のながき盃は私を鍛えてくれる。

### “球に生きる”

新制一 太田忠勝

私達は常に何物かを求めて行動している。蒼穹の下に青春の血潮を沸立たせて球を追ひ、球と共に馳せ廻る時、私達は何を考へ、何を求めんとしているのでしょうか。そこでは他の總ての雑念は悉く捨象し去られ、唯球、球、球……の一念に貫かれるのだ。そして勝敗なく、敵味方の対立觀念も又消散しているだらう。そこにあるものは、恰も生命あるもの如く軋々と飛び去り飛び来る球を中心にして二十二人の若人が傾け盡すその純粹な熱情のみなのである。他の何事も心に浮ばない。正に之に於て集い合う若人の心は球を通じて力強い軌帯をもつて堅く、鈍ひ付けられるのだ。これは體軀の形式論理で

割出し得ぬ超理論的な境地であらう。こゝにこそサッカーの本願が存し、スポーツの眞髓があるのだ。而してそれはあらゆるものの上に存するより高次の世界に成立するものと云ふよりは寧ろ他のあらゆるものを捨象したより根本的な原理的な世界に於て成立するものなのである。

然らば私達はこの原理的な世界に如何にして到達し得られるであらうか。私は唯簡單に云おう「球に生きよ。」と。「球に生きる」……唯それだけを目標にして、サッカーマンの一人として一個のスポーツマンとして、生命の情熱をかきたて、より一層の精進を続けていきたいと思う。

### ある日の日記から

新一 田中豊二

×月×日

今日正式に商大サッカー部員となり

先輩に紹介される、始めて持つる大学の部活動に胸ワクワク、半年ぶりの練習、R1でコンビをやる、ミスの連続

全々蹴れない。やはり僕はGKしか能はないんだ、蹴球である以上ケレなくては話にならぬ、幾分自信を失ふ

(11)

×月×日  
始めて経験する合宿……何となく不安へ之も小心者の盲想だらう。遅

れて練習も良く出来なかつた、が夕食後俄然活況を呈し明朗な雰囲気あふれ兎角汝も勝ちな僕の心も刺激受く……青春の謳歌……

×月×日

合宿としてW、Tの両氏にコーチ受く、兩の日はボール滑つてとり難い、屢々ミスる、セーヴィングの要領うまく呑みこめず、マガ飛び込みが怖い、憶怯者ッ！（怒し宿命？僕は生れつきなんだ、だからこそ修養中なんだよ）又キック益々弱い、T氏のはノレノレする位よく飛ぶせめてあの半分でも飛べば……

×月×日  
合宿……「感束さどつ、ましやかさ」意義ある語を聞き元を新たにす、怒の性格わかつて来て嬉しい、思ふ切

りこの部の雰囲気は浸たりとかく弱  
気でイデケテル吾輩も叩いてもら  
いたいものだ―精神革命?―函達さ  
だが友介乗旅

×月×日

トイキツクのコート受く、然し刀の  
ない肩?へいやフアイトの四題だよ

いせん弱い、皆途中でカツトされ口  
槽しい、キヤツチング段々慣れて来  
たが強いシユート(殊にM氏)は怖  
い、I氏のコーナーク、W氏のセン  
タリングは巧妙で何時もヒヤク、  
先づカソをつける輩に金力だ

×月×日

兼松と試合 若生に出る や、本が  
る、爲に突込みに欠け後味悪し 可  
成ミスる、最後のCKの時は大ミス  
―若しまぎれに叩いたが―突は突込  
んで取るべきなのに―おれはパンチ  
ンクぢやなく偶然手に当つたに過ぎ  
ず 危い― 要はダツシユだよ  
心すべし

原稿の提出を迫られ何とも致し難く  
旧作の披露にてお許し願ひ度し、  
夏 なかなか一匹の蚤に眠れず、  
冬 枯菌の雪耐ゆしづけさ年の暮

サツカー部に寄せて

新一 森 康全

私がサツカー部に入り早くも三ヶ月  
が過ぎた。今迄の私の生活には運動  
と言ふ活動分野は殆んど閉けて居な  
かった。中学時代の生活を返り見て  
今でも、炎天下競技に打ち込む級友  
それに対称して、暗い教室の窓から  
羨望的なまなざしで、しかもそれを  
打ち隠さんとするやうな面持でそれ  
に見入る己の姿がありおりと目に浮

に唯自分を凝視する外仕方なかつた  
己は、極めと言ふより、無知に近か  
つた。

そこで新しい生活に入ると直ぐ、こ  
れを解決しよう、深い溝を思ひ切つ  
て越して見よう、こころした気持が  
湧き、幾分愚念の思ひでサツカー部  
に入部して見た。一日二日と練習に  
馴れるにつれ、自分では割れ切れな  
かつた倦怠の気分は一切流され、生  
活活動に新たな息吹きを感じて来た。  
私は僅かな体験で運動を通じ、やゝ  
もすれば傷けられ、諦観的なもの  
なり勝ちな若い魂は保護され育成さ  
れて行くことを知つた。

運動と己れとの間は踏み切れぬ  
溝があるやうに感じ、実技の低劣さ  
はさうして先在的気持をより一層深  
めた。それ故に生活の中に定期的に  
襲ひくる停滞的気分は一度訪れると  
なかなか回復せず、常にそのやうな  
時は生活活動の上に大きな *cloud* が  
生ずるのであつた。灰色の気分の中

未だ日浅くはつきりしたものを握ん  
で居ないが、部の明朗な気分と先輩  
の親切な指導には深く感謝して居る。  
今後部の一員として、僅かな存在が  
も知れぬが、皆さんの善導を得て、  
明朗な気分を活躍したいと思ふ。



○ 新人紹介(新制) ○

高田菊夫(新制二年)……部八高、口

ハ丁足七丁、足が一丁足りないのは左のギツクが出来不出来のため、し

かしホワードとしては中々いける。

香オツラしているのは永倉卓平さ

んの後輩だけあつてコニ、クラしい。

練習中髪の毛をかき上げるくせは

消耗率大なり。

相川勝己(新制二年)……都三中、合

宿中の谷衣姿は播磨ヤ」とこんで

もない、テンヤワンヤのドツグ

だよ。それにしても気が強そうだ

が……。マーデヤンしてやんなせ

なんて鼻の下を長くして練習す

ッテはおさまへん。

久芳成行(以下新制一年)……部九高

一身上の都合であまり練習に出な

いが真面目な男、たゞ真面目すぎ

ると角が立ちますぞ！一歩後退ニ

歩前進。

本田忠勝……名経専。アレ！何処かで

聞いたことのある名男や、いや失

なるとさすが名にそむかず戦場の

け引きは道に入つたもの、好漢よ、

マサ男と云つてうぬづれぬな。

高末 陸……佐賀高、小生意気な面と

態度のため相当損をしている。本

当は根は気がやさしくて力もら、

あつとこと、力もちは余計だつた。

動作が敏シヨウになると一人前な

のだが。頑張れ！佐賀男児！

神代祥男……山口高、ア、どうして察

の奴等は」とまことに純情型、ヨ

キ顔を訂調させてグラウンドをかき

ずり廻るのは練習熱心、たゞ手は

後にばかり振り廻すものではない

ですぞ。相対性原理を無視しとる。

宮田幸三……高津中、白糸色男、全く

色男ですぞ、色かつぎ過ぎて黒く

はないか。いやこれは矢言々々、

しかしモテるものなるかなです。

アメリカもモテる国のための戦争に

かつたからです。練習中モウアキ

マヘン」とは「コリマワテカナイ

マヘン」

るか、或は又地球の引力猛烈の故

か練習中コロブとしばし起き上ら

ず、天の一角をならみ深呼吸、時

折モンゴレマン族の子孫なる奇

声を発する。真に天心ランマン、

自由党に入党するとエテケツト

とやらで一生下ずみですぞ。

山下誠……想川高、漫画に何んとか

ありましたな、そうそう「子熊の

マロ助」諸君コロ助を想像すれば

良い。練習が不足ですぞ。先輩の

スタルヒンがなまますぞ。手を上

げて球にブツかゝるのはストリプト

シヨウの真似ですぞ。注意々々

田中豊二……部三高、アプレアプレと

の、しられる時彼の存在はまこと

に奇、濃厚篤実、礼節の士、おだ

て過ぎるとテンカンを起してゴ

ルポストに金網をはられる心配が

ある。ギツクが出来不出来。足と球の

タイミングが悪い。足は足でも真

中の足ではないぞまし。

森 康全……豊島中、シンコウゼン

あれ台湾かな、北鮮か南鮮か、い

やいぬせんにしてはおとなしくこ  
 紳士だ。ドウモウさがない。おま  
 けに球がくると横になつて進むの  
 は祖先が蟹かいな。 矢を悪るう  
 (頓狂消化駄胃我苦 菜過野魔胃痴胡 記)

西松会名簿

(卒業年度) (氏名) (勤務) (住所)

大正15 松本 正雄 務 杉並区西高井戸一ノ一三九(我座39三二八六)

昭和2 高橋 朝次郎 キリンビール 鎌倉市材木座一、一五七(鎌倉一、四二二)

明石 教 大阪瓦斯 豊中市大字原田四三一

5 城島 頌雄 丸十産業 豊島区辰崎仲町二ノ三三

6 豊田 達治 岩王石醸長頼商会(茅場町一、九六一八) 豊島区長崎町六九

8 西田 嘉兵衛 御九証券 台東区上野町二ノ二七

10 二階堂 謹司 日本カーバイド 武蔵野市吉祥寺七九八

11 後藤 博基 東亜交易貿易部長 品川区上大崎一ノ四八六

水島 茂 日本橋本町二ノ三 浜松市名残町三六三ノ二

12 角田 昇 明光商事営業第一部長 文京区林町一六

田島 輝重 自営 紙業東京出張所長 目黒区上目黒八ノ六六八

森田 昭之 三井鉱山経理部 日本橋豊町二ノ一 中野区野方町一ノ六三一

枝村 藤三郎 日本カーバイド(丸の内一、八〇三) 神奈川県片瀬町片瀬一、八二六

鈴木 英二 日本鋳業営業部(赤坂。電話八四〇〇一八四六〇・九) 杉並区馬橋二ノ一七〇(中野38七七三)

13 鈴木 彰 港区赤坂英町三 新宿区南横町三三

大掛 隆久 新日本通商貿易部(京橋五三〇七七二六一九) 川崎市上丸子山王町一、四四一

昭和13

中央区宝町二ノ一

第一物産金物部 日本橋吳服橋二ノ一

世田谷区玉川興沢二ノ一九三

村井恒英

名古屋市昭和通横山町三ノ五八

14

後藤虎雄

日光町清老母勢二ノ一一

岩崎寛貞

東京建材

中野区鷺宮一ノ二

15

二階堂晴三

前官房長官付

大田区新開宿三ノ一四〇西木下方

菅積十朗

三菱鉱業大阪精錬所營業部

大阪市北区新川崎町一

16

早野六太郎

≡金物産

文京区丸山町一一(大塚、四五一)

金井雄吾

東洋レーヨン

中野区野方町二ノ一六一三

堀尾貞一

≡信鐵維貿易、浅草三、八〇八一九

杉並区上荻窪一ノ三一(荻窪四、一一)

台東区浅草橋一ノ四

吉沢貞雄

日本ダイカスト(目蒲線武藏新田)

港区麻布丸尾町五九

吉田富彦

≡井船船營業部(日本橋三、四〇〇)

世田谷区上馬町一ノ一七ノ二、三舟寮

日本橋室町二ノ一

清水隆

東芝電気經理部

南多摩郡町田町原町田二、一一一松岡方

石割知之

≡菱電機神戸製作所

(杉並区高円寺三ノ二一八)

神戸市兵庫区和田崎町三丁目

中森 守之助

足利市通五ノ二、八三二

松岡義彦

朝日新聞大蔵省記者クラブ(栄橋三、三三)

南多摩郡町田町原町田一、一一一

片山光夫

大阪銀行備後町支店

豊中市大字原田六四三松島方

新下 章

三井化学工業(九州大牟田)

(杉並区清水町二〇〇)

17

山本孝次

日本製粉(京橋五一九一、一六)

杉並区荻窪二ノ一三八(荻窪三、〇三二)



京橋三ノ二ノ四(仲倉ビル五階)

17 藤塚 亮 茂

東日本重工業本社経理部(日本橋二四〇七七八)

杉並区丹波二ノ七五

宮 沢

力 理研ゴム本社

世田谷区世田谷三ノ一、三三三小宮方

尾 川 達 一

大勢産業東京支店(丸の内三、二五三)

新宿区下落合一ノ四七六中島方

村 木 杉太郎

通産省通商企業局経業資金課

武蔵野市吉祥寺二、七二九

18 青 木 育 記

昭光音響(日本橋三九〇、五七三九・六七八)

新宿区東横町四六八

日本橋江戸橋一ノ六ノ三

環 藤 俊 雄

東日本重工業本社総務部(24二四〇七七八)

世田谷区北沢四ノ五〇三(松沢二、五三九)

土 屋 五 郎

三井鉱山本社経理部石炭課(24三三三一一九)

浦和市高砂町四ノ一六五

19 太 田 眞 三

森永製菓(三田45一・二〇一九)港区芝田町一、二

北多摩郡三鷹町下蓮雀一三四高木方

鷺 野 和 天

栗室

21 安 田 興 三 郎

小久保産業

品川区上大崎四ノ二三八(ドレスメーカー隣)

高 橋 三 善

木材業角丸商店(深川64三、五九六、二六〇四)

品川区上大崎四ノ二三八(ドレスメーカー隣)

眞 村 一 郎

木村業角丸商店(深川64三、五九六、二六〇四)

加 藤 春 樹

兼政(丸の内一三三七・九三、九〇六・三三三〇)

渋谷区代々木初台四七五

22 松 浦 巖

兼政(丸の内一三三七・九三、九〇六・三三三〇)

渋谷区代々木初台四七五

丸ビル四階(四〇二号)

23 永 倉 眞 平

理研ゴム

埼玉県北葛飾郡幸手町四、一九四

佐 藤 裕 之

千代田化工建設営業課

百鬼区中目黒一、四八〇

千代田区神田鎌倉町

高 柳 晋

大同印刷経理課(神田25三、四三三、一六)

新宿区西久保

加 藤 省

日本鋼管本社経理課(丸の内一六七一)

品川区大井出石五〇八(日本鋼管)

23 外岡 謙三郎 大多喜天然ガス

鈴木 哲夫 大東紡織(茅場町66-1-131-17)

日本橋野鼓町三丁目

24 森 重利 直 日本冷蔵貿易部

蛭子 義文 川崎汽船

25 森 一美 明光商幸

◇サツ力一部員名簿◇

部長 藤利重 隆教授 立川市曙町三丁目北二一六

学3 狩渡 俊夫 都四中 杉並区香掛町二六

幸 石川 正和 都五中 文京区根津須賀町八

2 吉沢 弘泰 都九中 西多摩郡三田村御岳八八

井田 登也 都五中 豊島区千早町一、三三、三六〇、五

小林 運夫 正則中 目黒区中根町二四三、二六五、二八

篠宮 清 都六中 南多摩郡日野町森三、三三三

堤 光義 都一中 北多摩郡久留米村南沢六五七

1 高橋 敬哉 相南中 世田谷区北沢四、四一、二

針谷 操 都四中 鎌倉市材木座一、一五七、二

新2 石井 弘志 都五中 杉並区西田町一、六九、九長崎方

田原 洋二 金沢一中 武蔵野市面壁一、二五

高田 菊夫 都八中 品川区豊町二、一、三七、一

久芳 成行 都九中 世田谷区東玉川町三三

文京区向丘弥生町二丁目(三)

豊島区金町四丁目大東紡金町工場

杉並区阿佐谷四ノ四二五 弘風荘

新宿区市ヶ谷台町二十一 板橋区板橋六ノ三、二五六、九

新2 相川 勝己 都三中 市川市市川新田一、二九

1 本田 忠勝 名経驛 一橋寮

高木 隆 佐賀高 杉並区香掛町三九坂井方

神代 祥男 山口高 一橋寮(角寮五室)

宮田 幸三 高津中 武蔵野市吉祥寺二、一四三

三井 光澤 高津中 北多摩郡小平町小川新田三三五

山下 誠一 旭川高 坂本方 八王子市四ノ町三三三奈良方

田中 豊二 都三高 市川市八幡一六四

森 康全 豊島中 文京区田町三〇

掲省先 青藤 隆 横須賀市新宿三〇五 豆子三六三

本田 忠勝 愛知県知多郡上野町大字龍尾字東前

三井 光輝 大阪府生野区鶴橋北之町一〇一四一

宮田 幸三 大阪市西区南堀江上通一丁目三十一

高木 隆 長崎市目覚町一〇九古川方

山下 誠一 北海道旭川市外神居村本町

神代 祥男 兵庫県武庫郡鳴尾村小松西果嘗住宅七

暑い日が續く、敗戦の焼印を押されて来る日も来る日も耐之の苦闘が續く、會員諸兄も夫々の職場に於て國の再興が見透しに付かぬ大事業であることを実感されながら御健闘の事と思ふ、現在大いなる運命に抗ふことなくこの大事業を成し遂げむには實際我々に於て出来ないことは我々の手筈をして成し遂げさせてやらぬはならぬ、種々な意味に於て、こつこつと蓄む我々の日常の生活に於て後進の正しい指導こそ急務中の急務であらう。

會員諸兄ともすれば仕事に追はれ勝ちになる。時を母校のサッカー部時代の回想に向けられたい、明朗、素朴、瀟灑、親和等々グラウンドであるボールを追つて、國立に小平に感激の裡に融け合つた且つての時代——その時代の精神を今母校サッカー部現部員は体験し見出さうとこの時流に俾さして敢然と立ち上つた、去年からのスタートは頻調と推移してゐる。

會員諸兄我々はこれに対して物心両面の應援を出せる範圍に於て送りうでは無い。在京會員の有志は、リーグ戦の秋をひかへ夏季合宿を前に松本さんの宅に会同次の様を打合せした。

一、秋ともなれば月に一度は出来るだけ集らう、場所は國立、そして練習を激励しよう、練習試合もしてやらう、リーグ戦中は試合場がいい、この日時は予め学生と連絡して適宜な日時を幹事より通知する、練習試合もしてやらう。

一、部費の不足は次の様にして補足しよう

一、会費 五拾圓 毎月醸出する(八月より実施する)

一、方法 在京會員は幹事持寄り 地方會員は鈴木英二宛適宜御送金願ふ

一、二十二年度幹事は左の會員に依頼する

大掛隆 久 東京都豊島区巢鴨二ノ五三 三井急務寮内(電大阪二二三一)

金井雄 吾 東京都中野区野方町二ノ六一三

鈴木英二 東京都杉並区馬橋二ノ一七〇 (電中野(39)〇七七三)

松浦 巖 東京都澁谷区代々木初台町四七五

若瀬十朗 大阪市北区新川崎町一三菱植業大阪製鐵所内営業課

會員諸宜敷く御賛同を乞ふ

尚其の節の打合せをのたが

今度の戦争で、我々は春秋に富む兄弟を失つた、犠牲と云へ、痛恨天を衝いて余りあり、残つた我々は逝きし兄弟の靈を慰めようではないか。今その兄弟の名前を拾つて見ると

- 神野清一郎 (昭二一) 注釋にて戦死
- 小西 正夫 (昭二五) ミリブリテンにて戦死
- 狩森 正雄 (昭二五) 満州にて生死不明
- 金原 実 (昭二五) フリッピン?
- 茂木 利孝 (昭二六) サイパンにて戦死
- 水島 行 (昭一七)

おん赤にも多いのに驚く、我々は二戦り兄弟に夫々のつながらりに於て追悼の一文を書かう。そして追悼の、蹴球、特別号を発行する、そして上梓の時、遺家族の方々にも繰合せ出席を願つて、どこかの寺を借りて追悼の法要を営まうと話合つた。会員諸兄、十月末迄に幹事宛に原稿を御送願願小

編輯其の他は凡べて幹事に御一任願小、必ず立派なものを上梓しようと思ふ各位の御賛同を願小や切な次第である。

さて母杖の様子に別紙現都員からの近況便りを御参考になつて頂き度い。一、会員の異動

- 猪瀬井一郎 (昭二六) 文京区本郷元町二ノ三三
- 城島 鎮雄 (昭二五) 豊島区長崎町二ノ三三 (勤務先文十産業)
- 豊田 達治 (昭二六) 豊島区長崎町六九
- 後藤 傳基 (昭一〇) 世田ヶ谷区玉川田園調布一ノ三五〇九
- 浅田 英暉 (昭一三) 中華民国安徽省安徽省鐵路六〇 台湾糖業公司第二分公司
- 重見 敏之 (昭一〇) 名古屋市中区和通櫻山町三ノ五八
- 池尾 隆二 (昭一五) 道後宅 千葉市神明町三五四 池尾一雄
- 金井 雄吾 (昭一六) 中野区野五町二ノ一六二三 (東洋レコーン)

- 浅 坂 彦太郎 (昭二二) 満州にて戦死
- 米山 大 三 (昭二五) フーケンビルにて戦病死
- 池尾 隆二 (昭一五) ミリギニヤにて戦死
- 荒川 正三郎 (昭一七) 北支
- 山田 久寧 (昭一七)

旧姓荒川

中森守之助 (昭二六)

吉田 富彦 (〃)

清水 睦美 (〃)

松岡 義彦 (昭天三)

一、会 計 報 告

(一) 收入ノ部

寄 附 金

会費其ノ他

繰 越 金

一、〇〇〇・〇〇

六八〇・〇〇

九二二・五〇

(二) 支出ノ部

会 合 費

雜費(香艸)

繰 越 金

二、二二〇・〇〇

二〇〇・〇〇

一八二・五〇

足利市通五丁目二八三二

目黒区柿ノ木坂三八 川瀬方

南多摩郡町田町原町田二一〇一 松岡方

同 右 (朝日新聞本社政経部)

昭和二十二年八月十日

西 松 会 幹 事

△ 會員 諸兄 各位

